
クローリアス～ハジマリノウタ～

kanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローリアス〜ハジマリノウタ〜

【Nコード】

N6965M

【作者名】

k a n o n

【あらすじ】

クロイツ王国第二王女シェナリアスは、優秀な兄と姉を持ち、魔法も勉強も苦手な十四歳の女の子。

聖なる光と漆黒の闇。

精霊と魔族。

クローリアスと呼ばれる世界の運命をかけた戦いが今始まる…

「戦いなんてどうでもいい…。あなたに消えてほしくない…。側にいてほしい、だから……………」

世界の危機を救うため、旅立つシエナと、仲間達の冒険ファンタジーです

注）本編の方は現在シエナリアスになっております。
次回から、シエナとして活躍します（＊´、´）ノ

文章は上手くはないですw

それでも、最後まで書きたいと思っているので、よろしく願います

また、読んでくれる方にはとても感謝いたします

1・記憶のカケラ

むかし、むかし。…あ、そんな昔でもないのか。

まあ…そこら辺はあまり気にせず、クロイツ国というお城に、シエナリアスというかわいらしい女の子がいました。

彼女は、三人兄弟の末っ子で、病気をすることもなく、勉強をすることもなく、元気に過ごしておりました。

そして今日は四才の誕生日。

彼女の誕生を祝い、城では盛大に舞踏会が開かれています。

「シエナリアス。こっちへ来なさい」

クロイツ国、コラート王。

実はね、その王様がわたしを呼んでいるの。

「はい、お父様」

大きな声で、はつきりと返事をして、お父様の待っている玉座まで歩く。

もう分かったでしょ？ そう、お父様がこの国の王様なんだよ。つまりは、この国のお姫様。すごいでしょ？

今日は特別な日だから、薄ピンク色のふんわりとしたかわいいドレスを着させてもらったの。

リボンもいっっぱい着いてて、お気に入りなんだあ。

でもね、ドレスって歩きにくいんだ。すぐに裾を踏んで、転びそうになっちゃう。その度に、兄様とお姉様に起こしてもらったんだよ。

だけど、今はがんばって一人で行かなくちゃいけないから、ゆっくり、ゆっくり階段をあがるの。

お父様の待っているところまで行くと、ドレスの裾を持って、軽

くえしゃく（会釈）をした。

これはね、とっても大切なご挨拶なんだって。
この日のために、いっぱい練習したんだから。

「うん、よく出来たぞ。シエナリアス、偉いな」

そう言つて、わたしの頭をなでる。

「えへへへへ」

これくらい簡単にできるもん。だってわたし、この国のお姫様だもんね。

今日はわたしの四才のお誕生日。

そのお祝いのパーティーなんだよ。

お客さん、いっっぱい。

お隣の国からとか、違う大陸からとかも、偉い人が来てるんだつて。

ごはんも、お肉とか、お魚とか、果物とか、いっぱい、いっっぱいあるんだあ！

ぎゅるるるう…。

あはは、おなかちやつた。

ごはんはいっぱいあるけど、ご挨拶とかをしなくちゃいけないから、まだ食べちゃダメなんだって。

早くごはん食べたいのに…。

これだから、コウム（公務）って大変なんだ。

っていうのは、お父様がいつも言ってたのをまねっこ。

パーティーは始まったばかりで、これからお父様のご挨拶。それから、隣国の王様や王妃様へのご挨拶のために、お父様と一緒に歩いてまわるの。

わたしは一緒に歩いていけたから、つまらなさそうだけど。だって、大人の話って難しすぎて分からないんだもん。

もうちよつと同じくらいの子がいてくれたらいいのになあ…。

あ、でも男の子はダメね。幼稚なんだもん。

さつきね、パーティーが始まる前に、なんとか国の王様がお父様のところに来てご挨拶をしていたんだけど、わたしと同じくらいの王子様も一緒にいたのね。それで、お友達になれるかなあと思ってお話したら、「チビ…」って言うんだよ！？

ちよつと背が高いからって、失礼しちゃうんだから。

名前は聞かなかったけど、今度会ったら絶対に文句言ってやるんだもん。

嫌なことを思い出して、一人でかつてに怒っていると、どこから見られている感じがして顔を上げると、たくさんのお客様がお父様のお話を聞いている。

あ。いけない、いけない。今は笑顔でいなくちゃいけないんだっ
た。

でも、パーティーってほんと退屈だなあ。

みんなはこういうの憧れるって言うけど、本当に楽しくなんか
いんだよ。

お父様のお話とかも、最初はシエナリアスおめでとうって言うて
くれるんだけど、一通り紹介が終わっちゃうと、今後の国のハッテ
ン（発展）問題とか、ザイセイ？（財政）のお話とかで、全然分か
らなくなる。

あーあ、つまないなあ。

町の子だったら、お母様がケーキを焼いてくれて、家族みんなで
お祝いとかしてくれるんだろうなあ…。

そんなこと言ったら贅沢だって思われちゃうかもしれないね。

こんなにたくさんの人にお祝いしてもらっているのにな。

でもね、たまにだけど、普通の子に生まれたかったって思っちゃ
うこともあるんだよ。

わたしには、お兄様とお姉様がいてくれるけど、お二人とも勉強
とかで忙しいから、あんまり遊んでくれないし。

そういう時、町の子だったら、近所のお友達と一緒に遊んだりして、楽しい毎日を過ごしているんだろ？なあって、憧れちゃうんだって、お友達たくさんほしいもん。

ふう……。なんだかとても寂しい気持ちになってきちゃった。

お父様のお話、早く終わらないかなあ。ずっと笑顔でいなくちゃいけないのって大変。

あゝあゝ。

今日はわたしが主役なのに、なんでこんなにつまらないんだろう。

ようやくお父様のお話が終わって、会場にはゆったりとした音楽が流れる。

ダンスの時間だ。

お父様も、お母様と一緒にダンスを踊っているし、お兄様やお姉様も、知らない人と一緒に踊っている。

でも、わたしは見てるだけ。

だって踊れないんだもん。

もちろんダンスのレッスンは受けたんだけど、大人とは背が違いすぎて無理があるし、会場には同じ年くらいの子はいるんだけど、近寄ってきてはくれない。

「はあ……」

みんなの楽しそうな顔が嫌になって、ちょっとだけお外に出てみることにした。

玉座の横にあるカーテンをひらりとめくり、ささっと隠れる。

幸い、誰にも気づかれなかったみたい。

バルコニーに続く扉を開けると、噴水が目の前にあり、白いお花がいっぱい咲いていた。

さすがに誰もいない。

うゝっ。初春とはいえ、三月はまだまだ寒いなあ。上着持っていればよかったなあ。

なんて思いつつ、とりあえず噴水横のベンチに座る。

「独りぼっちだね……」

ぽつりとそんな言葉が出てきた。

そして、なぜかぼろぼろと大粒の涙が溢れてくる。

「つく。つく……」

せつかくのお誕生日なのに、寂しい……。寂しいよお。

勢いよく溢れた涙が止まらなくて、やがてわんわん流れ出てくる。せつかくのドレスも涙でぬれちゃった。

どれくらい泣いていたか分からないけど、結構長い間外にいたと思う。

でもね、誰も探しに出てきてはくれないんだ。

わたしのことなんてどうでもいいのかな？

なんて考えて、また寂しくなってきた時だった。

「泣かないで」

とても優しいそうな声だった。

ハッとして顔を上げ、両袖で涙をふいて、辺りをキョロキョロ。

でも、誰もいない？　もしかして、気のせい？

「だ、誰？　誰がいるの？」

恐る恐る声をかけてみた。

返事はなかったけど、コツコツ……と、こっちへ近づいてくるの足音が聞こえてくる。

音のするほうを見ると、誰かが歩いてくるのが分かった。

やっぱり聞き間違えじゃなかったんだ。

最初、暗くて姿は見えなかったけど、やがて月の光に照らされて、声の持ち主が姿を現した。

「脅かしてごめん」

と、気まずそうにする男の子。

さらさらとした金色の髪に、白いタキシード。

年はわたしとあまり変わらなさそうだけど、彼の方が年上な気がする。

誰だろう？　どこかの国の貴族さんかな？

なんて考えていたら、向うから離しかけてきた。

「君、シェナリアス様だろう？　せっかくのお誕生日なのに、なぜこんなところに？」

そっぴいながら、胸のポケットから白い絹のハンカチを取り出し、わたしに差し出したの。

「え？　あの…。わたし……」

対応に困って、ドレスをギュツとつかんでうつむく。

「あ、ごめんね。変なこと聞いて」

慌てて、ふるふるふる。と首を振る。

「こちらこそ、ごめんなさいです」

なんか、とつても恥ずかしかったんだ。泣いているところを見られちゃったしね。

「隣、座つてもいいかな？」

「うん…」

きっと悪い人ではない。それは直感で分かった。

ベンチに二人並んで、しばらくの沈黙。

だって、何を話せばいいのかわからないんだもん。

こんな風に、男の子と一緒にいるなんてこともなかったし。

ちらりと男の子を見ると、彼もわたしを見ていて、ニコツと笑ったの。

ドキッ！！

今まで感じたことのない感情だった。

すぐ胸がドキドキしてる。

笑顔がすごく優しく、思わず顔が赤くなっちゃった。

「パーティーは退屈？」

と、言ったのはもちろん彼。わたしはうなずくように、小さな声で、

「…うん」

と答えた。

「そっか。そうだね。僕のお城でもよくパーティーをするんだけど、退屈でさ、よく途中で抜け出したりしているんだ」

「えっ？ あなたのお城？」

「あ…。うん。僕も君と同じような身分のものだよ」

と、照れくさそうに話してくれた。

ほえー。じゃあこの人、どこかの国の王子様だね。

ここまで聞いちゃったら、どこの国か？ って言うのが一番気になるわけで、もちろん訪ねてみたんだけど…。

「どこの国な…」

「秘密！！」

「えっ！？」

「どこの」と「秘密」はほぼ同時だった。

彼を見ると、いたずらっ子のような顔で笑っている。

わたしはというと、面食らったような顔。そりゃそうだね。

「シェナリアスって面白いなあ」

「ぶうー！ ひどおい！ ふーんだ」

ぷくつと顔を膨らませ、拗ねてみる。

「あゝ。僕が悪かったよ。ほらほら、拗ねない」

わたしは彼のおろおろと慌てている姿を見て、彼はわたしのぷくりと膨らませた顔を見て、同時にぶはつと笑ってしまった。

「あはははは」

「ぶはははは」

楽しい。こうやって男の子と一緒に笑いあうって、今までなかった。

「もう、大丈夫そうだね」

「えっ？」

「あ、ほら。笑顔…」

そっか。さっきまでわたし、泣いていたんだもんね。

彼のおかげで、すっかり寂しい気持ちが飛んで行っちゃった。

「あ…。ありがとう」

「どういたしまして」

と、笑顔で言ってくれた。

うー……。この笑顔ずるい。

でも、わたしってばすっかり元気になったかも。ほんと、彼のおかげ。

あ、お城では最後の曲が流れている。この後はわたしからの挨拶。そろそろ戻らないといけない時間だ。

分かってはいるんだけど、なかなか足が動かない。

だって、こんなに楽しい時間を過ごしているんだもん。

「あ、そろそろ終わりだね」

わたしがいえなかった言葉を彼が言う。

「うん……」

「確かこの後はシエナリアスの出番じゃなかった？」

「そうだよ……」

「そつか。じゃあ……。そろそろお別れだね」

グサツ。っと突き刺さる言葉だった。

分かってはいるんだけど、やっぱり寂しいもん。

でも、これ以上は迷惑かけられないもん。

ギュツと手に力を入れ、無理やり笑顔を作り、

「今日は本当にありがとう。またいつか……」

それだけ言って、背中を向けて城内へ戻ろうとした。

その時、ギュツと手を握られた。

「ちよつとだけ待って」

驚いて、振り返る。

「な、なあに？」

「あのさ、ちよつとだけ、僕と踊ってもらえませんか？ 下手だけど、シエナリアスとの思い出に、一緒に踊りたいんだけど……」

そう言われちゃったら、断れるわけがないよね。内心すごくドキドキしちゃってたし。

「ち、ちよつとだけなら……」

さつき、さりげない素振りを見せちゃったから、ちょっと気まずかったけど、やっぱり踊りたい。

「よかった！ では…」

そう言つて、わたしの手を取り、音楽にあわせステップ。
風が気持ち良い。

「今日、僕が会場にいたのって気づいてた？」

踊りながら彼が話しかけてきた。

「うん。知らなかったよ。お父様が、堂々とした姿を見せるために、真正面を向いていなさいって言われていたし」

「そっか。残念。僕、一番前にいたのになあ」

「えっ！？ 一番前？」

「シェナリアスつてば、笑ったり怒ったり、いろんな表情を見せてくれるんだもん。面白かったなあ」

「むう。また面白いつて言ったあ」

「あはは」

楽しい時間はあっという間。最後の曲もそろそろ終わり。

今度こそ本当のお別れの時間がやってくる。

ダンスを止めて、噴水の前に向かい合わせで立つ。

「わたし、戻るね」

「うん。今日はありがとう」

「いやだなあ。わたしがありがとう。だよ」

「ははは。僕は何もしてないよ」

寂しい気持ちはいつぱいあったけど、今は楽しかった気持ちのほう強い。

「あのさ…。また会えるかな？」

「もちろん！ 絶対に会えるよ。すぐには会えないかもしれないけど、いつかきつと僕から会いに来るから。その時は名前と国、ちゃんと教えてあげる」

あ、そういえば名前すら聞いてなかった。

「じゃあ、約束だね！ 次会えたときに、もっといろいろお話しよ

うね」

「ああ！ あ！ ほらほら。そろそろ本当に戻らないと！ シエナリアスがいないと大騒ぎになっちゃう」

「そうだった！ それじゃあ最後の挨拶、ちゃんと聞いていてね」
「ああ！」

時は経ち…

シエナリアス、十四歳。

あの日から、もう十年が過ぎました。

結局、あの人とは会えていません。

あなたは今も、わたしのことを覚えていますか？

悪夢の足音？

「ふん　　ふふん　　らん、ららん」

お城の敷地にある庭園。

四月ということもあり、色とりどりの花々が色んな表情を見せてくれる。

城の庭師達が世話をしているだけあって、手入れはばっちり。

午後の優雅なひと時に、のんびりお散歩しながら過ごすのもいいよねえ。

気分は上々で、スキップしちゃったり、くるくるって回ったり、ほんと気持ちいいなあ。

空を見上げると、雲ひとつない青空。

うーん、風が気持ちいい。

そうそう、わたし、シエナリアス。

一ヶ月ほど前に十四歳になった、なんの取り柄もない女の子です。

あ、一応クロイツ国第二王女やってます。

まあ王女と言っても、優秀なお兄様やお姉様のおかげで、わたしは公務をすることもなく、だらだらって過ごして一日が終わっちゃって、なんかダメダメな感じ。

そんな毎日に、憂鬱感があつたりなかったり…。

あ、別に何もしてない訳じゃないのよ？

一般的知識や魔法学の勉強の他にも、踊りや料理なんかも習って、将来的には立派になれるように努力はしているの。

ただ、勉強は大の苦手。特に、体を使わない勉強はダメ。

地味なのは向いてないんだ。すぐ眠くなっちゃうもん。

魔法学なんて、何度教わっても頭の中に入らないのよね。それで叔父様に何度怒られたことか。

あーあ。外の学校とかで勉強ができたら、お友達もたくさんできて、勉強教えあったり、今とは違った感じになってただろうなあ。

ほら、身分的には王女様じゃない？

外に出て何かあったら大変！　ってことで、滅多にお城から出られないんだ。

あああ！！　わたしつてば鳥かこの中の鳥なのねえ…。きつとずっと出られないんだわあ…。

って、変なことやってる場合じゃないね。

まあそれもこれも、わたしがまだまだ未熟だからってことなんだ。もし一人前になって、お父様やお母様に認められたら、わたしもいろんなところにいけるようになる。

現に、二十歳になるシバお兄様と、十八歳のサイベリアンお姉様は、わたしなんかよりとっても優秀で、国の代表として各国を飛び回り、公務をこなしてる。

今も出かけていて、お城にはいないの。

うーっ。わたしも早く認められて、お城を出て世界各地を観てまわりたいんだあ。

お城の外は知らない世界が広がっていて、素敵なんだろうなあ…。

両手を広げ、思いつきり背伸び。

うーっ。気持ちいい！！

なんか、頑張れる勇気がわいてきたよお。

ぱたぱたぱた。

庭園の中を誰かが走ってくる。

誰だろう？

と振り返ると、

「姫様！！　姫様！！？」

という声が聞こえる。

この声は、メイドのマリーヌだ！

わたしは、彼女に分かるように大きく手を振り、叫ぶ。

「マリーヌう。ここよ。どうしたの？」

わたしの姿を見つけるなり、黒髪のおさを揺らしながら走ってきた。

「んもう、姫様！ やっぱここにいらっしやっただんですね。もうすぐ魔法学のお時間だというのに、お部屋に戻れないんですから」と、庭園の時計塔を指差した。

時刻はもうすぐ二時になるうとしている。

「あれっ！？ 今日って魔法学あるの？？ わたし聞いてないよ？」

「あるんです！ 昨日ちゃんとお伝えしました！ ほらほら、早く戻ってくださいませ。もうジーニヤス様はお見えになってるんですよ！！」

と、人の気持ちも知らないで背中を押すマリーヌ。

「ああ〜ん。勉強なんてしたくないよお。そうだ！ 代わりに授業受けてよ」

駄々をこね、突拍子もない発言に、マリーヌは足をピタツと止めると、お化けのような形相で顔を向けてくる。

「ひ〜め〜さ〜まあ〜！？ 何をバカなことを言ってるんですか！

！ 姫様にはいっぱい勉強をしてもらって、魔術師長としてご活躍されているサイベリアン様のようになっていただかなくてはならないですよお」

ひいひい！ こ、怖いよお。

「そ、そんなこと言われてもお。お姉様が立派にやってるんだから魔法へたっぴのわたしなんて必要ないよ。邪魔になるだけだし。それに、数年もしたら他国へお嫁にでも行くんでしょ？ だから、魔法学なんてやる必要はないと思うの。だから……」

負けじと言い返すんだけど、問答無用！ といった感じでさらに詰め寄ってきた。

「必要あるんです。他国だって、王族ならば魔法くらい出来なければ、どういう教育をしてきたのか!?　ということになるんです。そうだったら、姫様はクライツ国の評価を下げかねないですよ!?!」

と、人差し指を鼻に差し向けた。

「うぐぐつ…」

せ、正論でございます。

この世界では、魔法が使える者〃王族の証。といわれるくらい、魔法はわたしにとって大切なもの。

まあ、人工的な魔法は能力さえあれば誰でも使えたりするんだけど…。うーん。そこらへんの話はややこしいから、今度詳しく話してあげるね。

とりあえずは、わたしが魔法を使えなかったら、王女と認めてもらえないってことに等しいってことなんだ。

あ、言っておきますけど、わたしだって一応は使えるのよ。まあ…。初歩の初歩なんだけどね。

でもさ、初歩でも使えれば王族の証になるわけだから、問題ないと思うんだけどなあ。

なんて甘いことを考えていると、

「姫様。初歩の魔法が使えるくらいで、良いわけないんですからね」と、貴方の考えは分かっているんです!　と言わんばかりの表情のマリーヌ。

「あうゝ。マリーヌの意地悪…。でも、ほんとなんでもわたしの考えてること、分かっちゃうんだね」

わたしが目をくるくるさせて聞くと、呆れたようにため息をついた。

「はあ…。分かりますよ。何年一緒にいると思ってるんですか?　もう八年ですよ!?　姫様は行動と発言に成長がないからすぐに分かります」

「あは…。あはは…」

行動と発言に成長がないなんて、酷すぎるわ。
まあ本当のことだから仕方ないんですけど。

そうそう、マリー又はわたしより五歳年上のお姉さん。
幼い頃に両親を亡くしていて、身内が誰もいないの。

まあ普段はそんなことも感じさせず、わたしのために一生懸命働いてくれている。

でもなんだろうな。わたしはお世話係っていうより、お姉ちゃんみたいな感じで接しちゃうんだよね。

サイベリアンお姉様は忙しくて全然会えないし、会っても落ちこぼれのわたしとは口をきかないし。

正直姉妹って思ったこと、あんまりない。だから、マリー又とこ
ういうやり取りをしていると、なんか良いなって思っちゃう。

後ね、マリー又ほどメイド服が似合う人もいないと思うんだよね。
なんて、発言がおじさんみたいだけど。

わたしがにやにやしていると、再び眉間にしわを寄せてジッと見た。

「姫様ってばわたしの気持ち分かってるんですか！？ にやにやし
ちゃって気味悪いですよ」

こけっ。

「んもう。気味悪いなんて、失礼しちゃうんだから」

わたしの気持ちも知らず、マリー又は怪訝な顔をしている。

ふうんだ！ お姉ちゃんみたいっていうの却下しちゃうもんねっ。
なんて勝手に思っていたとき、

「あゝー！！」

と、突然叫んだのはマリー又だった。

「ちよ、ちよっと何よおー！！」

あまりにも大きな声だったので、思わず耳を塞いじやった。

「もう二時過ぎちゃってるじゃないですか。さあ、早く戻りましょ

う！ これ以上待たせたらわたくしクビになっちゃいます」

と、半泣きだ。

「もう叔父様帰っちゃってるわよ。だから大丈夫だって。…って！
強硬手段なのか、強引にわたしの手を引く張るマリーヌ。」

「大丈夫！ じゃないんです。もうこうなったら意地でも連れて行
きますからね！！」

と、ぐいぐいと引く張っていく。

「ええ〜！！ やあだあ〜！！！」

結局、抵抗もむなしく、自室に戻る事になったんだ。

悪夢の足音？

ふんわりとしたローズティーの香りがわたしを優しく包む。

さつきマリーヌが入れてくれたんだ。

あーあ。窓からはぼかぼかした陽気が差し込み、頭もぼつかばか。マリーヌに部屋に連れてこられて、すぐさま叔父様の長いお説教。それだけでも疲れたっていうのに、こんなんで勉強なんか身につくわけないよ。

今も、一生懸命叔父様が教科書を片手に話していると言うのに…。

うつら、うつら…。うつ、まぶたが重い。

うつら、うつら…。ダメダメ！寝たらダメだってば！！

うつら、うつら…。……。

「シェナリアス！聞いているのかい！？」

「わああっ！！」

もう少して気持ちよく寝られるところだったのに、突然でかい声を出されたもんだから、思わずビクリして声が出ちゃった。

どう考えても、わたしがいけないんだけど。

「まったくお前という奴は…」

呆れたように首を振っている。

「す、すみません」

「はあ…。シバにもサイベリアンにも魔法学を教えてきたが、二人とも真面目に取り組んでおったのになぜお前だけこうなんだ…」

と、つぶやいている。

だから言ったでしょ？わたし、座ってるだけの勉強は嫌いだって。それに、叔父様の授業って、本当につまらないのよね。

なあんで、直接は言えないけど。

「大体、お前という奴は危機感が足りないんだ。このまま魔法学も

身につかないでどうするんだ！？ 兄上だって心配しているんだぞ？ ぐちぐち……」

あーあ。またはじまっちゃった。

こうなると誰にも止められないんだよねえ。

叔父様は、王様、つまりお父様の弟なの。

ぼっさばさの黒髪で、髭は無造作に伸ばしっぱなし。くるぶしまである黒のローブがなんとも暑苦しく、お父様と並ぶと全然似てないし、正直王族には見えないんだ。

三十歳という若さなのに、見た目は四十代後半だもん。

もうちよつとビシつとした格好をすればいいのにつて思っちゃう。そうそう、叔父様は去年結婚したんだけど、ファラさんって言うて、とっても優しくて綺麗な人なんだあ。

どうしてこんなむさくるしいおっさんと結婚したんだか、今でも分かんない。

あ、王族だからっていうのは多分ないと思うんだ。

ファラさんは隣のフォルト大陸にある、ザラマ国の第三王女様だもん。

なんと、まだ十九歳なんだよあ。

二人でいる姿をたまに見るんだけど、叔父様ったら、ものすごくにやけた顔だったっけ。

ちよつと気持ち悪いかも……。つて思っちゃったのは絶対内緒よつ！！

あ、そうそう、叔父様はわたしに魔法学を教えてくれるんだけど、その実力はお父様の遙か上に行くのよ。

この国では二番目の実力者だつて。

昔は叔父様が国一番だったらしいんだけど、今はお姉様が一番。当たり前よね。お姉様は世界でたった一人、あの魔法が使える人だもん。

だからこそ、お城には留まれず、各地を巡らなくちゃいけないんだ。

国中の人から期待され、お父様やお母様からも期待され、とっても羨ましいなって思っちゃう…。

って、今はお姉様の話は置いて、（あんまりお姉様の話はしたくないから…）叔父様のお話だったね。あはは…。はあ……。

「というわけで、お前には一生懸命魔法学を学んでもらわなければならぬのだ。分かったな!？」

……。

「シェナリアス!？」

「あ！ はいっ!！」

やばっ。叔父様のお話し終わっちゃったよ。結局ほとんど聞いてなかったし。

まあどうせ魔法学についてのうんちくをうだうだ言ってただけだと思っただけだね。

「では、先ほどの続きをはじめよう。魔法書の三百六十五ページを開いて」

言われたとおり、魔法書をペラペラとめくる。

この魔法書には、多くの魔法について語られている。

初歩的な魔法から、上級の魔法。そして禁断の魔法まで、何百と書かれているのだ。

叔父様の教育方針は『読んで学べ!』なんだけど、正直読んだだけって実に入らないんだよね。

実際に魔法の練習させてくれた方が、実に入ると思っただけど、叔父様曰く、初心者の実践練習は暴走する危険があるからダメなんだって。

まあ、叔父様の考え方も、分かるには分かるんだけどね…。

「では、今日は火の魔法、ファイアーボールについて学ぼう」

そう言うのと、いつもと同じように、魔法書を読み始めた。

「ファイアーボールは、四大精霊のうちの一人、炎の精霊サラマンデイスの力を借り、無数の火の玉を放つ魔法である。威力はその魔法を使う者の魔力に比例。詠唱呪文は『

μ

ファイアーボール』である」

ええつと。

… μ

……？

んもう。こんな長

いの覚えられないよお。

と、心の中で叫ぶ。

この世界の魔法は、詠唱呪文というのがどの魔法にもあるんだけど、なかなか覚えられないんだ。

初歩的な魔法だと詠唱呪文は短く、上級魔法になると長いらしい。魔力の強い人は詠唱呪文はなしでも使えるらしいんだけどね。

わたしみたいな素人は、ちゃんと詠唱呪文を唱えないと使えないんだって。

魔法ってちょっと不便よね。トホホ。

「ファイアーボールは基礎中の基礎だ。前回教えた風の魔法、『ウインドカッター』や、水の魔法『ウォーターリング』、そして次にやる地の魔法、『ロックブレイク』は四大魔法の初歩である。しっかりと覚えるように！」

「はあい…」

うつつ。前回の魔法なんてもう覚えてないよお。

「では、ロックブレイクに移る前に、もう一度詠唱の読み方の復習をしよう」

と、叔父様が呪文を詠唱しようとした時だった。

コン。コン。コン。

というノック音に続き、

「ジーニヤス様、ガウストンでございます。至急お話したいことがあるのですが」

と、早口に話す声。

ガウストンって、確かお父様の使いの一人だ。

「一体何事だというのだ！？」

そう言いながら、扉を開ける叔父様。そして、真剣な面持ちの一

人の男が姿を現した。

「勉強中の所、失礼いたします。シェナリアス姫様」
軽く会釈をするガウストン。

わたしもにつこりと軽く会釈を済ませる。

「早急にお耳に入りたいことがございますので、ジーニヤス様、ちよつとこちらへ……」

そういうと、叔父様を連れ、扉を閉めてしまった。

なんだろう……。わたしには聞かれたくないこのなのかなあ？

そう思ったら、とっても気になって、扉の方に近寄り、耳を当てて聞いてみた。

なにやらひそひそと話が聞こえるんだけど、具体的に何を話しているのかまでは聞こえない。

わたしはそつと扉を開いてみた。

すると、

「何っ！！？ それは本当か！！？」

と、鮮明に声が聞こえてきた。

「ジーニヤス様、お声が大きすぎます」

「し、失礼した。で、このことは姫には？」

「お伝えになられたほうがよいかと……」

「そうか……。それは大変なことになったな……」

一体何が起きているというのか？

わたしがどうのこうのつて聞こえたけど……。

まだなにやらひそひそと話をしているようなんだけど、さっきみたいに鮮明には聞こえない。

しばらくすると、こちらの方へ近づいてくる気配を感じたので、扉をささつと閉め、急いでソファアに座り、何事もなかったかのように、魔法書を手に取った。

カチリと扉が開き、叔父様だけが部屋に入ってきた。

どうやら、ガウストンはもう立ち去ったようだ。

叔父様は、ちよつと青ざめたような顔でソファアに座り、すつか

り冷めてしまったローズテイーに口をつけた。

「どうかなされたんですか？」

訪ねると、手にしていたカップをゆっくり置き、大きなため息をついた。

「はあああ……。ちょっと困ったことが二つ起こった。一つは、隣のフォルト大陸に魔族が現れたそうだ」

「えっ！？ ま、魔族って、あの北の大地に昔から封印されてたつて言う？」

「ああそうだ。何千年もの昔、神と魔族との間で起こった神魔戦争……。神が全ての力を使い、北の閉ざされた大地に封印をしたと言われる、闇属性の魔獣や悪魔達だ。つい先日、遠く離れたデイルフェニア大陸で魔族を発見したとの報告を受けたばかりだというのに。まさか……。まさか隣のフォルト大陸に……」

フォルト大陸って、ファラさんの母国、ザラマ国がある大陸のことだ。

ファラさんが事のことを知ったら、絶対心配だろうなあ……。

きっと叔父様もファラさんのことを考えているんだろう。とても深刻で、辛そうで、なんと声をかけていいのか分からなかった。

そんなわたしの状況を察したのか、慌てて状況を付け加えた。

「ああ。すまない。ザラマの方ではなく、もっと北の、ノースガリア国の方らしい。なんでも、魔族一匹相手に町が一つ滅んだそうだ」
「ええ！？ 町が一つ……」

滅んだって……。魔族って一体どんな力を持っているというの！？ わたしは文献でしか魔族を知らない。

破壊と殺戮を求め、人の闇の心に付け込み、心を操る。そして光を持たず、ただただ無を求めるものだと。

なんだか曖昧な表現だけど、もう何千年も姿を現していなかった魔族のことなんて、知っている人が少ないのも当たり前。

当然、残されている書物や資料も少ないの。だから、なぜ今再び蘇ったのかも分からない。

なんて、わたしはわたしなりに様々な考えをめぐらせていた時だった。

叔父様が突然立ち上がり、窓の方へと歩み寄り、外を眺めている。その表情は、こちらからは見えないが、とても重々しいものを感じた。

「叔父様？」

その声をかけると、静かに、ゆっくりと口を開いた。

「シェナリアス、大切な話がもう一つある。とてもとても大事な話だ……」

と、窓の外を眺めたまま言った。

そして、わたしが「なんですか？」と言う前に、その衝撃の答えを聞くことになるのである。

悪夢の足音？

お姉様が姿を消した？　って、一体どういうこと？

叔父様が口にした言葉はこうだった。

「サイベリアンが、ザラマ国領土内のジルコニアの町から姿を消し、すでに一週間も経過しているそうだ…。シバを含め、数十名が行方を捜しているが、未だ見つからないらしい…」

そんな！？　お姉様は勝手に単独行動をするような人じゃない。

だとしたら、誰かに連れ去られたとか、襲われたとかで、まさか…

…！？

うつん。絶対そんなことはないよね。

だって、お姉様ははっきりしているし、強いもん。それに、もし万が一のことがあったとしたら、さすがに魔力の低いわたしでも、気で感じるができるはず。一応、血のつながった家族だしね。

きつと大丈夫！

と、自分に言い聞かせてみても、不安感が残る。

うつむいたまま、お姉様のことを考えていると、叔父様がわたしの頭をぐしゃぐしゃつとなでた。

「なあに暗い顔してんだ！？　大丈夫。サイベリアンは無事だ。争った形跡はなかったというし、公務続きで羽目を外しなくなったんだろ。それに、もしも連れ去られたとしても、あいつはお前と違って超一流の魔術士だからな、そう簡単にやられはしないよ」

と淡々とは言っても、叔父様も心配なんだろうね。

笑顔がちょっと引きつってるもん。

サイベリアンお姉様は、わたしより四つ年上の十八歳。

お母様譲りの、さらさらとしたストレートの黒髪。お父様譲りの緋色の瞳。身長も高くて、出るとこ出て、引っ込むとこ引っ込む

っていう、抜群のスタイルの持ち主。

城下町では、サイベリアン様フアンクラブなんっていうのもあるんだって。

そりゃそうよね。お姉様、美人だもん。

それに付け加えて、優秀、まじめ、上級魔術士とくれば、文句なんてあつたもんじゃない。ほおんと完璧な人。

だからわたし、ちょっと苦手なんだ。自分は美人でもなく、優秀でもなく、まじめでもなく、へっぽこ魔術士…。って思ってるから、まるで正反対じゃない？

自分で言っててひどいなあって思っちゃうけど、本当のことなんだよね。

昔から、お姉様とわたし、結構比べられててさ。本当に姉妹なのか！？ って疑われたこともあつたつけ。

その時は笑って流すけど、結構シヨックなんだよ。

お姉様…。

苦手だけど、やっぱり無事でいてほしい。帰ってきてほしい…。

どうか、ご無事でありますように…。

その後、叔父様はお父様に呼ばれたとかで、部屋を出ていった。魔族の件も重要なことだけど、クロイツ国にとっては、お姉様の搜索が最重要になる。しばらくは忙しい日々が続きそうだ。

なあんで、わたしはここにいてただけだから、何にも考える必要なんてないんだ。

でも、本当にそれでいいのかな？ 自分のお姉様が行方不明なのに…。

一人しかいない自室は、とても寂しい。

わたしはベッドに寝転がり、ただただボーっとしていた。

どれくらいの時間がたっただろうか。すっかり日も落ち、辺りは真っ暗。

いつもなら、おなかの虫がなく時間なのだけど、今はそんな気分じゃないみたい。

「はあ〜」

と、何十回目かのため息をつき、再び天井を見上げた。そして、そのまま深い眠りについてしまったんだ。

どれくらい眠っていたらうか、

コン。コン。

というノック音が、わたしを深い眠りから呼び起こす。

「う〜ん。まだ寝るう」

ゴロン。と転がり、ふかふかの布団を頭からかぶる。

コン。コン。

再びノック音。

「うう〜。だあれ？ マリーヌ？」

顔だけを布団から出し、呼びかける。

「寝ているところをすまない。わたしだ。大切な話がある。開けてくれないか？」

わたしさん？

ふふふ〜。そんな人に知り合いはいませんよあ〜。

だけど、なんか聞いたことある声……って！！

「お、お父様！！？」

大慌てで飛び起き、ぼさぼさになった髪の毛を手ぐしでとかし、

服をぱんぱんとたたき、しわを伸ばす。

いつもはパジャマに着替えて寝るんだけど、昨日はそのまま眠っちゃったから、ドレスのまま。

ベッドの横にある、大きな鏡をちらりとのぞき込む。

よし！ とりあえずは大丈夫！

寝起きとはいえ、一応レディーなもの。身だしなみくらいは整えないとね。

鏡に向かって、にこつと微笑む。

うん。いつものわたしだ。

全ての確認を済ませ、お待たせしていたお父様を中へ招き入れた。

「こんな時間にすまないな」

「ううん。大丈夫。あれ？ お父様、どこかへお出かけになられるんですか？」

いつものお父様は、貴重で高価なヴァンパスという真っ赤な生地で織ったマントを羽織り、この城に代々受け継がれているたくさんの宝石の散りばめられた王冠をかぶっている。

けど今は、なんとも貧相というか…

黒い生地の簡素な服に、同じく黒い生地のマント。

普通の人が見たら、王様とは気づかないだろう。

めったに見ることのない格好だから、上から下までジロジロ見ちゃったよ。

そんなことも知らず、お父様はソファへ腰をかけ、わたしにも座るよう促した。

「昨日、ジーニヤスからサイベリアンの話は聞いたな？」

やっぱりお姉様の件か。

なんとなくそんな気はしてたんだ。

「うん。ザラマ国領土内の町で姿を消したって…」

「そうだ。無鉄砲なシバならともかく、まじめなサイベリアンの行方が分からなくなるとは…」

表情は硬く、なんだか疲れた顔をしている。

きつとお姉様のことで頭がいっぱいなんだろうな。

そりゃそうよね。実の娘だもん。

うっん。それだけじゃない。

お姉様が必要なのは、世界でたった一人、あの魔法を使えるから。精霊系最高峰魔法にして、閥属性の高位魔族に対抗できる唯一の魔法であり、この国の王族に生まれ、選ばれたものしか使うことができない魔法。それは…

悪夢の足音？

- 神聖魔法 -

そう…。

お姉様がそれを使えるようになったのは半年前のこと。
魔族が現れたのもちょうどその時期。

だから、お父様や各国の王も、これは何か関係があるに違いない！
って調査を進めていたの。

お姉様とお兄様がお城にいないのも、その件について調べるため。
お父様はお姉様が旅に出るなんて大反対だったんだけど、他国の
お偉い様方の意見もあつて、しぶしぶ調査に向かわせたんだって聞
いてる。

でもね、裏情報で聞いたんだけど、他国はお姉様に自分の国に
来てもらつて、万が一魔族が攻めてきた時に備えたいらしいんだ。

そりゃそうよね。魔族が攻めてきた時、お姉様がいてくれたら安
心なもの。

「ああ。やはりわたしが間違っていたんだ。どんなことをしてで
も、サイベリアンをこの国に留めておけば、こんなことには…」
と頭を抱えている。

「お父様のせいじゃないよ。それに、お姉様はきつと無事。遠く離
れていても、気は確かに感じるから…」

そう言うつと、顔をあげて苦笑した。
「そうだな…。こんな姿を見せてしまつて、すまない」
と、いつになく弱気だ。

お父様のこんな姿を見たのははじめてかもしれない。
いつもは凜々しく、勇敢で、的確に意見を述べ、この国の王とし
て立派に勤めを果たしてきたのだから。

「シェナリアス…。わたしはこれからザラマ国へ向かう。サイベリアンを見つけて絶対に連れて帰ってくる。本来ならば国王であるわたしが自ら動くのは得策ではないのだが、ジツとしていることはできないんだ」

「お父様…」

わたしの目の前に座っているのは、一国の王ではなく、愛する娘を思う、ごくごく普通の父親の姿だった。

そんなお父様を元氣付けたくて、精一杯の笑顔で言ったんだ。

「うんっ！　ここは任せておいて！！　わたしだって王女だもん。」

お父様の代わりくらい立派に勤めてみせる。やろうと思えばなんだってできるんだから。だから、なにかあつたら、遠慮なく言ってね」

「シェナリアス…。ふふふっ。いつまでも子供だと思っていたら、立派なことを言うようになったもんだ。これなら任せても大丈夫そうだな」

と、いつもの優しい笑顔を見せてくれた。

「そうだよお。なんでも言って。わたしね、お勉強もできないし、魔法も使えないけど、お父様や、お母様の役に立ちたいってずっと思ってたの」

「ありがとう。わたしはこんな優しい娘をもつて幸せだ…。実は今回、シェナリアスにも協力してほしいことがあるんだ」

「えっ、本当！？　なにになに！？」

意外な言葉に、興味津々といった感じで、耳を傾けた。

だって、お父様からの頼まれごとなんて、はじめてだったんだもん。

「難しいことではないんだがな。シェナリアスはプレイマー神殿を知っているだろう？」

「うん。ヴァーノの町の北にある、ザツフェリアの森にある神殿ね」
小さいころ、精霊降臨の儀式とかで何度行ったことがあるから、なんとなく覚えてる。

「そうだ。その神殿はクロイツ国を守護している大精霊、カルエス

を奉っている神聖な場所だが、魔族バルバイトスを封印した地でもある。各地で魔族が目覚めているという報告を受け、念のためその場所の調査をしたいとの依頼があり……」

「分かったあ！ わたしが神殿の扉を開ければいいのね！！」

「ご名答。プレイヤー神殿はクロイツー族でないと開けることはできない特殊な扉だ。ソマリとジーニヤスには城を任せる。そうするとほかに開けることができるのは……」

「うん。任せて！ そのくらい簡単よ！！」

「そうか、助かる。本当はジーニヤスに行ってもらうつもりだったのだが、今回の件で城内も大騒ぎだ。ソマリだけでは不安な面もあるようだし、残ってもらうことにしたんだ」

確かに、お母様だけでは今の状況下での対応は大変だよね。

お母様の気持ちを考えたら、お姉様がいなくなっただけで頭がいっぱいだと思うし、冷静に判断することは難しいと思う。

血の繋がりはないとはいえ、叔父様も優秀な人だし、人をまとめる力もある。

なにより、お父様が信頼している人だしね。

それよりも心配なのはお母様よね。

お姉様の件で塞ぎこんでなければいいんだけど……。

「ソマリは大丈夫だよ……」

ポツリとつぶやいた言葉だった。

「えっ？ わたしが考えていることが分かったの？」

というと、お父様はふふつと笑った。

「表情を見れば分かるさ。シエナリアスは昔っから顔に出るタイプだったしな」

は、恥ずかしい。

わたしってそんな顔に出るかなあ……。

あ、でもマリーヌにも結構言われたことあるかも。

『今日はご機嫌ですね。なにか良いことあったんですか？』とか『

姫様はおなががすくと、不機嫌になりますよね」って。

おなががすくと…の方は、ただけわたし食いしん坊なのよ！？
って思っただけ、よく考えてみたら、おなか空いたときに限
って、しばらくご飯がなかったりすると、些細なことでも機嫌が悪
くなったりしちゃうんだよね。

うーん。気をつけないと…。

って、話が脱線しちゃったから、元に戻そう。

「お母様、お父様とわたしがいなくなったら、寂しくないかなあ…」
その一言に、一瞬表情を強張らせたお父様。

「本当は寂しいと思う。わたしにも、シェナリアスにもここにいて
ほしいと思っている。特に、短い期間とはいえ、シェナリアスが城
を離れるなんてことは今までなかったからな。わたしも、シバも、
サイベリアンも、最近は城を空けることのほうが多かった。城で待
つソマリにとって、シェナリアスの笑顔は心の支えだったんだんだ

…」

その話を聞いて、なんかジーンと来ちゃった。

「お母様、わたしのこと必要としてくれていたんだね…」

「ああ。シェナリアスといると、自分も元気になるっていつも言
っていたよ」

「なんだか嬉しいな。お食事の時に少しお話したりするだけだから、
そんな風に思われていたなんて、思いもよらなかった」

「何気ないやり取りが、彼女にとっては一番の安らぎになっていた
んだ」

そうなんだ…。こんなの、聞かなかったら全然分からなかった。

お母様は、お父様と一緒に公務をこなすことが多い。

内容も様々だけど、主には国内の統治問題について。

これが結構めんどくさそうなんだよね！。

わたしも何回か会議に出たことはあるんだけど、何を話している
かさっぱり分からなかったもん。

王妃様って、お城で優雅に生活しているかと思われがちなんだけ

ど、全然そんなことないんだよね。

うーん……。わたしもお母様のお役に立てたらいいのに……。

そうだった！

「お父様、わたし、早く用事を済ませて戻ってくる。そして、お母様と叔父様のお手伝いをして、お父様達の帰りを待ってるよ」

「シェナリアス……。本当にありがとう。わたしも早くサイベリアンを見つけて、シバと三人で戻ってくる」

「うん！！ ようし！ そうと決まったら、早く出発しないとねっ」
頭の中はすでに出発モード。

ささっと立ち上がって、部屋の中をくるくる見渡し、なにが必要かな？ そうだ！ あれを持っていこう。なんて考えてたんだから。
「おいおい。すごいやる気だな」

「もちろん！ 王様直々の頼まれごとだしね。それに、早く帰ってきてお母様の不安を少しでも取り除いてあげたいし」

「やる気があるのは良いことだが、もうちょっと聞いてほしいことがあるんだが……」

「あ、そうなの！！？ ごめんなさい……」

はははっ。わたしってば慌てすぎちゃった。

もう一度ソファアへ座り、お父様の話に耳を傾ける。

「ヴァーノの町までの道のりは馬車で半日だ。城の裏に馬車を手配しておくからそれに乗りなさい。道案内と護衛にはベルナルとリユカスがいるから、困ったことがあったらなんでも頼むといい」

ふんふん。馬車で半日と、二人が道案内つと。

あれ？ ベルナルとリユカスって、久しぶりだ。

二人とも十五の時からこのお城の兵士で、今はお兄様の元で働いているの。

この国で行われる、剣の大会ではいつも上位。毎回優勝のお兄様にはおよばないけど、腕は確かだね。

「それと、今回の依頼者達だが、すでにヴァーノの町にいるらしい。ガストニア。シンフォーネ。ザーランド。それぞれの国から一人ず

つの三人だ」

「えっ！？ もう着いてるの？」

いつからいるのか知らないけど、しばらく待ってるんじゃないのかな？

「ああ。依頼の手紙はヴァーノの町からだった。おそらく三人でプレイヤー神殿に行き、開かなかったからこちらへ依頼をしてきたんだろう。まさかプレイヤー神殿の扉がクロイツ家しか開けられないなんて思ってもみないだろうからな」

「そっか。それじゃあ早く合流した方がいいんだね」

「そうだな。そうそう、三人はヴァーノの町にあるゴーズという宿屋に宿泊しているそうだ。確認時にはこれを見せるといい」

そついうと、懐からごそごそと白い封筒を取り出し、差し出してきた。

「これって、送られてきた手紙？」

「ああ、そうだ。これなら見せれば、書いてきた本人ならすぐに気がつくだろう」

封筒を受け取って見てみると、右下に羽の広げた鳥と時計のような絵が描かれている。

時の精霊、クロノスを守護する国、ガストニアの紋章だ。

「三人の名前は中に書かれているから、移動中にでも確認するとい。それともう一つ…。シエナリアス、手を出してごらん」

「？？ 手を？」

言われたとおり差し出すと、お父様がそつと手を被せ、一緒になにかを手のひらに置いた。

見てみると、金色のチェーンに黒い石のついたネックレスだった。

「これは？」

わたしが聞くと、お父様は自分の首に下げているネックレスを見せた。

「これと同じものだ。これはクロイツ王家である証。身分を証明するときに使いなさい」

「身分を証明するとき…」

黒い石にはクロイツ家の紋章である、金色の翼が描かれている。さらに裏には、不思議な文字が書かれていた。

「金色の翼だけならクロイツ国の使者である証明。裏に文字が書かれているのはクロイツ王家である証なんだ」

「へえ…。この、後ろの文字はなんて書いてあるの？」

「これはわたしにも読めないんだ。文献によると、神が使っていた文字ではないかと言われているけど」

「神様が使っていた文字！？　すごいね…」

「なんか、わたしがこんなの持つちゃっていいのかなあって思っちゃう。」

仮にも王女なんだから、良いに決まってるんだけど。

「いいかい。これは本当に必要な時にしか見せちゃいけないよ」

「うん。分かった」

王族は常に狙われやすい。

それは小さいころから聞いてたから、なんとなく分かる。

『世の中には国のやり方を快く思っていない人もいる。それに、王族と知って近づいてくるものもある。人を疑うことは良いことではないが、用心は必要だ。だから、城の外に出るときは王族という身分を悟られてはいけないよ』

お兄様がはじめて国を出るときに、お父様が言っていた言葉。なぜだかしっかり覚えてる。

「わたしはもうじき出発する予定だ。シェナリアスは用意を済ませ、お昼ごろ出発するといいたろう」

「うん。分かった！　お父様も気をつけて」

こうしてわたし、はじめて城を発つことになったんだ。

これが長い長い、旅のはじまり…。

必然の出会い？

ヴァーノの町へ続く街道。

辺りは草原が広がり、奥には国境のシクレイマス山脈が連なっている。

ちなみに、あの山脈を越えるとガストニア国。

だけど、まずあの山を登って両国へ行こうという人はいないだろうね。

というのも、シクレイマス山脈って、六千〜八千メートル級の山々だから、そう簡単にはいかないの。

じゃあどうやったらガストニア国にいけるかといえば、ヴァーノの更に北にある、キュリアムの港町からなら、ガストニア国領土の港町、ハザインまで行ける。

ガストニアとシンフォーネ、ザーランドの国はシクレイマス山脈のような障害がないから、交流が盛んみたい。

クロイツ国だけ海と山に囲まれているから、振興を深めようにもなかなか難しいのよね。

ガストニアに行くにしても、最低一週間はかかるもん。

あ、もしかしたら、今お父様が向かっているフォルト大陸大陸のザラマ国の方が早く着いちゃうかも。

ザラマ国はクロイツ国のあるカノン大陸から西側に位置しているんだけど、港町からすぐ近くだし。

ふふっ。詳しいでしょ！？ いずれはいろんな国に行ってみたいと思っているから、地理に関してはちよつと得意なんだあ。

あ、そうそう。あれからお父様と別れて、早速準備。そして十分ほど前にお城を発ったの。

本当はお母様や叔父様にお見送りをされる予定だったんだけど、急なお仕事が入っちゃったから、ひっそり出発したんだ。

お城から出る時って、大体国中の人からもお見送りをされるんだ

けど、今回はなんてったってお忍びだからね。

お城の裏道からこっそりと馬車で出たんだ。

なんか、こんなのはじめてでほんとわくわくするよ。

そうそう、目立つちゃいけないから、服もドレスから着替えたの。前から懂れてた服なんだけどね、実は、城下町にあるカルストーレ魔法学校の制服なんだ。

その生徒さんが一年に一度、上級魔術士の魔法を見に来ることがあって、その時にその制服を見たんだけど、かわいいのなんのつて。

色はネイビーでちよつと地味な感じもするけど、首元に赤いリボン、右ポケットには校章とおしゃれな感じ。そして、タイトスカートいい感じ。

生地は伸縮性が効いてるから、動きやすそうだし。

え？ よくすぐ手に入ったね。 って？

そうなのよね。なんか動きやすい服ないかなーって聞いたたら、なんと、叔父様がこの洋服を用意してくれたのよ。

びっくりでしょ！？ サイズまでピッタリだったし…。

なんかちよつと怪しい感じもするけど、ま、いつか。

「うーん。風が気持ちいいなあ」

気分もよかつたし、馬車から顔を出してみる。

すると、即座に、

「姫様！ 危ないですからおやめください」

と、大慌てで注意してくるのは、わたしの目の前に座っていたりユカスだ。

そうだ。すっかり忘れてたよ。今回の旅に二人がいることを…。てかこの二人のせいで、記念すべきはじめての旅がブルーになりそうなんだよあ。

なぜかといえば！ とにかく口がうるさい…。

特にリユカスよ。

出発する時も、「姫様！ 走ってはいけません！！」とか「姫様！ おしとやかにしてください！」とか……。ちよつとくらいはしゃいだっていいじゃん。と、心の中で文句。

わたしはほつぺたをぶくつと膨らませ、むすつとした顔で席に座った。

「まあまあ。リユカスは姫様が心配なんですよ。そのお身体に何かあったら大変ですから」

と、リユカスの隣に座っているベルナールがフオー。

そうは言われても、なかなかすぐには機嫌はよくならない。

ていうか！ 二年前くらいは二人とも敬語じゃなくて気軽に話してくれてたのに、久しぶりに会ったらすっかり変わっちゃってさ。なんか嫌な感じ！。

そうなのよ。前はよくお兄様を含めた四人でよく遊んでいたの。

剣の修行の合間だったから、そんな一日中遊んだりとかはしていなかったけど、退屈してたわたしにとっては、とても楽しい時間だったんだ。

何より、お城の中で働いている人は、王族への気遣いがすごいんだけど、二人は隔てなく接してくれて、それが何よりよかったの。それが今じゃあれだもの。

「はあああ……」

思わず大きなため息が出ちゃった。

「どうかなされましたか、姫様？」

と、ベルナールが心配そうな顔で覗き込んでくる。

「ううん。なんでもない……」

わたしがそういうと、二人は不思議そうに顔を見合わせ、リユカスが顔を近づけて、

「ははあん……。お前、俺らが変に扱うから機嫌悪いんだろ？」
と言った。

「えっ？」

と、驚くわたしに、慌てるベルナール。

「お、おいっ。姫様になんて口の聞き方するんだ。もう昔とは違うんだぞ!？」

当の本人はへっちゃらな顔で、

「いいじゃん。城からもずいぶん離れたんだし。てかこいつ相手に敬語とか疲れるわ。ジーニヤス様直々に丁重に接するようにとかわれたけど、もう耐えらんねえ」

と言ったんだけど、その発言に、わたしとベルナールが顔を見合わせ、「ぷぷぷっ」って噴出しちゃった。

「あはは。何それー」

「ははっ。お前信じられないわ。まあ俺も疲れたけど」

「だろあ？ それに俺は元々敬語とか苦手なんだよねー。どうせお前だって俺らに敬語とか使われたくないだろ？」

「もっちゃん。というか、二人とも別人のようで気持ち悪かったよ」

「な、なんだとお!？」

と、リユカスが拳をにかけて迫ってきた。

「きゃーっ!」

と逃げるようなふり。そして再び馬車に笑い声がひびく。よかったあ。二人とも全然変わってない。

「じゃあこれからは普通に接するってことでいいな!？」

その質問にはもちろん大きく首を振って、

「うんっ!」

と答えた。

「あー…。ほんと肩こったわ」

と首を回すリユカス。

「俺も…」

そういつてベルナールまで首を回しはじめた。

なんなのこの光景。

「そつえばさ、シエナもシバとは会ってないんだよな?」

首をコキコキと鳴らしながら聞いてくる。

「え？ あ、うん。そうだよ」

ちよつと今ドキツとしちゃった。リユカスがわたしのことシエナって呼んでくれたよね？

なんかとっても嬉しいな。覚えててくれたんだあ。

シエナって言うのは、リユカスと出会ったときに付けてくれた呼び名。

「シエナリアスってよびにきいからシエナでもいいよな？」

ってことで、シエナになったんだ。

「はっ？」って思ったんだけど、あだ名とか付けられるのはじめてだったし、OKしたんだ。

結局その名前で呼んでくれたのはリユカスとベルナール。そしてお兄様だけだったけどね。

あ、さすがにお父様やお母様の前では普通だよ。

そうだった！ お忍びの旅ってことだし、この先名前を聞かれたら、シエナってことにしておこう。

「シバは元気にやってるかなあ……」

とベルナールがつぶやいた。こちらもすっかり普通のしゃべり方だ。

「うん。元気みたいだよ。一週間ほど前に手紙届いてたし」

「そうか。それはよかった。シバがここを出てから二ヶ月……。サイベリアン様の件もあるだろうし、まだ当分は戻ってこれないだろうな」

ベルナール、お兄様のことが心配なんだよね。元々とても仲がよかったし。

「うーん。シバがいないと剣術にも磨きが入らないんだよなあ」

「うんうん。ってお前はシバがいても稽古サボってるじゃないか」

「あれ？ そうだったけ？」

ってしらばつくれた顔。

ほんと調子いいんだから。

あ、今更なんだけど、簡単にリユカスとベルナールの紹介をするね。

リユカスとベルナールは二人とも十九歳。

二十歳のお兄様とも年が近いし、余計に気が合うのかもね。

十五歳でこの国の兵士志願の申し出をしてきて、日々剣の修行をしている。

本当はお兄様と一緒に旅に出る予定だったんだけど、城の戦力を考え、二人は残ることになったんだ。

普段はちゃんとした訓練服でがちり身体をガード！　なんだけど、今は軽武装。　剣はちゃんと持っているけどね。

まあでも、のどかなところだし、魔獣や魔物はあまり出ないって聞いているから、剣の出番はなさそうだけど、万が一出てきたら、しっかりガードしてもらおうっと。

「ぎゃあああああああ！！　ま、魔物だあ！！！」

ほらね。魔物が………って！

「ど、どどどどどいうこと！！？　うわっ！！　ぎゃっだった……

…っあ…いたっ！！！」

声にならない声。

馬車が突然猛スピードで走り出したもんだから、バランスを崩しちゃった。

「シエナ、大丈夫か！？　しっかり捕まってるんだ！！！」

と、リユカスが起こしてくれた。

「あ、ありがとう」

馬車はスピードを落とさず、時折強い揺れをお越しながら走っている。

「おいっ！　どうなってるんだっ！！？」

ベルナールが馬車を引いてくれているおじさんに怒鳴る。

「ひいひいひい！！！」

我を忘れているようで、ベルナールの声が届いていないのだろう

か？

「ちっ！ リュカス、外の様子は！！？」

「いんや…。特に変わったところはなさそうだ。なにか見間違えたんじゃないか！？ あっ！ こらっ！！ お前はそこでジッとしてる！！」

「むぎゅっ！」

ひ、ひどい。頭押し付けられた。

わたしだって外の様子が見たいのに！。

馬車はしばらく走り続け、やがて冷静を取り戻したのか、緩やかに川の流れるほとりで停車したのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6965m/>

クローリアス～ハジマリノウタ～

2010年10月8日11時44分発行